

地域密着、
女ゴコロ密着の
企画力が勝負

全国「リビング新聞」編集長の、 2011年イチオシ企画

全国の「リビング新聞」には、地域に腰をすえ、日本を元気にしたい、女性を元気にしたいと、日々、紙面企画やイベント企画に知恵をしぼっている編集長がいます。たんに情報を発信するだけではない、読者を動かし読者をつなぐ…2011年に実施し、成功を収めた、読者のパワーが実感できたという各地の事例を一挙にご紹介。地域に密着し、女ゴコロに密着した企画は「消費者を巻き込んで動かす」ヒントの宝庫です。

Musashino

サンケイリビング新聞社
リビングむさしの

石川香里

武蔵野本部 編集長



**ハロウィン・イベントの
意外な盛り上がり**

母の日、敬老の日、バレンタイン…と流通商戦は沢山ありますが、どこも低迷気味と聞きます。その中で「ハロウィン撮影会」を流通と共催。当日は参加券ゲットにがんばるパパや、孫の勇姿(?)を見守る祖父母、手作り衣装で臨むママ友グループなどが開店前に行列。家族や友達など多様な組み合わせ100組で賑わいました。盛り上がり欠けるハロウィンといわれていますが、「思い出を記録に残したかった」という声が多数。意外な盛り上がりを見せたのは「写真」のおかげ？

Tokyo

サンケイリビング新聞社 リビング東京中央
東京西 東京南 東京 Bay 東京リビング

和田直子

東京本部 編集長



**「ミセス登山部」発動！
キーワードは「一人じゃ行けない」**

“山ガール”ならぬ“山ミセス”を！ 40代後半から50代のミセスをターゲットに、初めての人が参加できる「ミセス登山部」を計画。内容は、プロの登山インストラクターに学ぶ、座学と山登り（初級・中級）2回の登山教室。土日コースと平日コースを設け、130人以上の応募の中から抽選で60人のミセスが山デビューを果たしました。通常のイベントよりも参加者の年代が格段に若く、Web環境のある人がほとんどなので、今後はサイトを中心に活動を続けていきます。

Kashiwa

サンケイリビング新聞社
リビングかしわ

向山奈央子

東京本部 編集長



**ワインでおでかけ気分も復活！
地元フレンチ店で「昼の美食部」始動**

震災、計画停電、放射能問題で、おでかけ気分も下がり気味だった柏エリア。地元のフレンチ「ル・クーブル」の協力で、ミセスの部活「昼の美食部」を立ち上げました。月に1度ランチを味わう会で、1回目は赤、2回目は白、最後は口ゼと、食事に合わせたワインも用意。お一人様から母娘、ママ友グループなど多彩な顔ぶれが集まりました。中でも目立ったのが、ワイン好きの人たち。「昼間から飲めるのがうれしい」という声も。おでかけムードも復活でした。

Tochigi

栃木リビング新聞社
リビングマロニエ

岡田実華

編集企画本部 編集長



**子育て中だって音楽を楽しみたい！
親子対象のクラシックコンサートが好評**

クラシック音楽を聴きたい、子どもに聴かせたいと思っても、「会場で子どもがじっとしてられるか不安」などの理由で、コンサートへ出かけられないママは多いもの。そんなママたちのために開催している「親子のためのクラシックコンサート」。2011年は幼稚園生から小学生までのおさんと保護者を対象に、約400人の参加者を集めて行いました。子どもでも飽きない選曲と美しいフルートの調べに、参加者の満足度も高いイベントとなりました。

Fukushima

福島リビング新聞社
リビング郡山

鈴木朱美

編集長



**お総菜でプチゼいたく
自粛ムードを食で払拭**

震災による自粛ムードを払拭しようと、「読者推薦！ 絶品お総菜」特集を実施。高級品を買うには抵抗があるけれど、お総菜なら…というミセスのキモチが動いたのか、掲載した各店から反響が大きかったと喜びの声が。読者からも、「プチゼいたくができた」「楽しい企画だった」と大好評でした。その後、10月に開催した毎年恒例の「復興支援！ ふくしまうまいものフェスタ」にも、1万人以上の来場者が！ “おいしいものは人の心も体も動かす”を実感しました。

Sendai

仙台リビング新聞社
リビング仙台

藤崎由紀子

編集長



**寄せられた善意は1223万4034円
あしなが育英会を通じ震災遺児へ**

東北各地を襲った東日本大震災。復刊した4月16日号震災特別号から義援金受付を始めました。リビング新聞の読者の多くは子育て世代であることから、寄付先はあしなが育英会。親を亡くした子どもたちに渡してもらうことにしました。銀行振り込みをはじめ、封筒に入れて持参していただいたり、宮城県内外の方から寄せられた義援金は1223万4034円（2011年9月で終了）。次代を担う子どもたちに心を届ける。明確な支援内容が、大きな輪となってつながっていきました。

DenenToshi

サンケイリビング新聞社
リビング田園都市

林ひろ子

編集長



**時代にフィット、読者の心にはまる媒体は
いつでも、地域に“新風”を起こせます**

この秋は、家族でグリーンライン（GL）沿線の紅葉&グルメを満喫しよう！ 横浜本部扱い横浜市交通局の市営地下鉄・GL沿線情報誌「ぐるっと」創刊号を田園都市で企画制作担当することに。沿線の紅葉SPOTとグルメ店舗掲載、特に今回神奈川県立四季の森公園をメインの紙面が分かりやすいと好評で、駅設置1万部はまたたく間にはけ、秋の同公園は「ぐるっと」を手に散歩を楽しむ家族連れで大賑わいとなりました。2012年、田園は地域Webで新風を起こそうとトライ中！

Yokohama

サンケイリビング新聞社
リビング横浜東 リビング横浜南

川戸眞澄

横浜本部 編集長



**地元が大好きなハマっ子だから
「横浜&日本を元気に！」に共感**

東日本大震災以降、地元経済の落ち込みが深刻な中、こんな時こそ普段どおりの生活を取り戻し、横浜から日本を元気にしていこう！と企画したのが6/25付「がんばろう！ We Love YOKOHAMA」特集。林文子横浜市長をはじめ、地元経済人、文化人、スポーツ界からの応援メッセージをお届けし、地元企業からのお得情報や「元気応援クーポン」を掲載。「リビング横浜Web」のみで受け付けた読者プレゼント応募は2765通。ハマっ子の地元愛は元気の起爆剤に！

Tama

サンケイリビング新聞社
リビング多摩

石河久美

多摩本部 編集長



**「合唱団結成」の呼びかけに100人超！
今年3月レクイエムを合唱します**

東日本大震災から1年後の3月、震災で亡くなった方々のために、みんなで鎮魂歌「レクイエム」を合唱しませんか？ 読者にそう呼びかけたところ、100人を超える応募があり、「リビング多摩モーツァルトレクイエム女声合唱団」が誕生。3月の本番に向けて週1回の練習（計22回）を重ねています。いつもはオトク情報に敏感なミセスたちが、く合唱>という言葉にこれだけ反応するとは！震災があった今年だからこそ、“心に響く”企画が受け入れられたのだと思います。

Chiba

サンケイリビング新聞社
リビング千葉

西脇英子

千葉本部 編集長



**千葉の被災地「飯岡」での津波を学ぶ
会に遠方から多くの親子が参加**

千葉県内で唯一、津波の被害を受けた飯岡市。その被害の状況を学び、今後、命を守るための教室を開催しました。意外だったのは、当地飯岡の市役所や被害者の方々が大変な協力をしてくださったこと。ボランティアの方々被災地を案内、そのあと、グループごとに車座になってリアルな体験談を話してくれました。命ががらに非難したそのナマの声に参加した親子たちは貴重な体験ができたと感じ。悲惨なことも次世代に伝えていかなくてはならないことを実感しました。

Funabashi Narashino

サンケイリビング新聞社
リビングふなばし・ならしの

佐野昌子

編集長



**夏の子ども講座「ニッポンを知ろう」
親子寄席に定員を超える親子が参加**

この夏、「ニッポンを知ろう」をテーマに、千葉本部と子ども講座を展開しましたが、船橋では「親子寄席」を開催。定員130人を超える140人が参加しました。前座、色物（紙切り）、真打が登場する本格的なプログラムでしたが、大人以上に大喜ぶ子どもたちを見て日本の伝統芸能の魅力を再確認。教えてもらったばかりの小唄を舞台上上がって披露してもらった場面では、たくさん子どもたちが手を挙げ、「生の舞台」は子どもたち感動を与える」ことを確信しました。

Saitama

サンケイリビング新聞社
リビングさいたま中央

丸山実木

埼玉本部 編集長



**非常事態！ 「計画停電」で大混乱
『停電を楽しむ』の提案で共感**

震災後、さいたま市は全域が計画停電対象地域に。主婦は、食事の支度を何時にするのか、洗濯はできるのか、明かりの購入、暗闇が初めての子供への対応などでヘトヘトでした。そこで読者から知恵を集めて『穏やかに過ごす 停電タイム情報』を発信。「子供と一緒に星空観察、影絵などで遊ぶ」「音があるだけでも安心。地元ラジオ局なら近所情報も」「食事はアウトドア料理で楽しんで」など。記事を読んで「私だけじゃない。たくましく過ごしたい」と共感の声が多数届きました。

Hiroshima

広島リビング新聞社
リビングひろしま

高山由美子

編集部 編集長



**震災が教えてくれた、人のつながり
心を贈る“ハンドメイドチャリティー”**

東日本大震災後「リビングらしい支援ができないか」という声から、昨年実施したハンドメイドイベントを「心を贈る“ハンドメイドチャリティー”」にパワーアップして7月に実施。チャリティーワークショップには124人が参加し、設置した募金箱と合わせて5万3885円に。被災者に贈る手作りシュシュと巾着袋は335セットも集まりメッセージを添える方も！「お金だけじゃない、こういう支援もあったんだ！」と読者から高く評価された、リビングらしい支援ができました。

Kita Kyusyu

西日本リビング新聞社
リビング北九州

奥永智絵

編集部



**手づくり作家を集めたマルシェに
普段のイベントと違う読者層が参加**

10月に商業施設で開催した「おうち生活*マルシェ」は、計7組の手作り作家と、編集部おすすめの人気パン店計9店が出店。開店前から詰めかけたのは若いおしゃれなお母さんたちでした。北九州は全国平均よりシニアの割合が高く、通常のイベントも年配の女性が多数。今回は違った光景で、同施設によると、前年比160%の来客数。読者を動かしたのは、「主婦が主婦のために作る雑貨」「普段遠くて買いに行けないあのパン」「お店では買えない希少性」だと感じました。

Kagoshima

南日本リビング新聞社
リビングかこしま

内村由美子

編集企画部 編集長



**熟年ミセスは、自己表現への関心大！
「主婦川柳」で広がる読者の輪**

一昨年初めて行った「リビング主婦川柳コンテスト」。「自分たちと同じ立場の読者がこんなユニークな川柳を作るなんてびっくり！」「心から楽しめる特集。続けてほしい」など、読者に好評だったことから、今年も協賛企業を募り、継続して実施しました。2回目の2011年、特に目立つのは熟年ミセスからの応募。創作意欲が旺盛で、人生の酸いも甘いも知り尽くした70代、80代の作品も続々。読者層の幅広さ、そして読者の感性の豊かさを実感できる貴重な機会になっています。

Fukuyama

福山リビング新聞社
リビングふくやま

岡田千恵

編集部 取締役編集長



**2日で1万5000人以上が来場
17回目を迎えた「リビング特選市」**

1999年から開催している「リビング特選市」は、この春で17回を迎えました。毎回、2日間で1万5000人以上が来場するビッグイベントです。「良いものを安く」をテーマに、「衣」「食」「住」「遊」「健」の5つのゾーンで会場を構成。全国のご当地グルメが味わえるスペースも設けているので、滞在時間が長くなっている様子。子供たちに人気のキャラクターショー、握手会・撮影会も毎回好評。家族連れからシニア世代まで、幅広い集客が出展業者から評価の高いイベントです。

Matsuyama

えひめリビング新聞社
リビングまつやま

小原明美

取締役編集長



**ママが動けばパパも動く？
だんだん強くなるパパの存在感**

10月に開催した恒例のキッズフェスタ。今回は児童虐待防止推進運動も連携して「オレンジリボンえひめリビングEBCこども博第11回キッズフェスタ」として大いに盛り上がりしました。当日集まったファミリーは約4万2000人。印象的だったのは若いパパ。ママ抜きでパパと子どもというツーショットも珍しくなく、ベビーカーを押して会場を回り、遊具やゲームに興じるパパはとってもいい顔。次回はさらにパパがもっと得意顔になれる内容を盛り込みたいと思っています。

Kumamoto

熊本リビング新聞社
リビング熊本

松田恵美子

編集部 編集長



**被災地へ熊本から声援を送ろう！
東田トモヒロ復興応援コンサート**

熊本の熱い想いがひとつになった！7月1日、熊本出身のシンガーソングライター・東田トモヒロさんと、その呼び掛けに応えたアーティストによるチャリティーコンサートを主催。会場の熊本県立劇場演劇ホールは、762人の観客の熱気で埋め尽くされました。被災地から遠く離れた九州からも声援を送り続けたい。当日のパワーは、きっと東日本の皆さんに届くと確信しています。入場料と義援金の合計232万4502円は、仙台と福岡のリビング新聞社を通して全額寄付しました。

Okayama/Kurashiki

岡山リビング新聞社
リビングおかやま リビングくらしき

新山 謙

執行役員 編集長



**口に出して言えない「ありがとう」
“夫婦の絆”を映画館で再確認！**

リビング銀婚式特別企画「夫婦日和…思いやりと感謝のメッセージ～特別映画鑑賞会」は地元の老舗映画館を会場に2回目を開催し、感動的な一日となりました。当日参加者は70組140人（前年88組163人）。会場では、映画を見ながら涙したり感動したり…と皆さん“夫婦の絆”を再確認。リビング新聞スタッフの手作りメッセージ集「普段、口に出して言えない“ありがとう”の感謝の気持ち」も配布。「こんなに感激したのは何十年ぶり」と読者の心に響いたイベントでした。

Takamatsu

高松リビング新聞社
リビングたかまつ

石川恭子

編集部 編集長



**バツ恋にペット恋活…
「婚活イベント」で、毎回カップルが！**

世に婚活イベントは数あれど、リビング主催という“安心感”で好評なのが「恋活」シリーズ。一昨年11月以来、月1回ペースで15回。毎回平均3組のカップルが誕生、今までに1組ゴールインするなど、今や定番イベントになっています。人気の理由は、パーベキューや、バツイチ参加OKの「バツ恋」、ペット好き限定「ペット恋活」など、毎回趣向を変えたり、ターゲットをしぼったりしていること。年齢も20代～50代と幅広く、新たな読者獲得にもつながっています。

Fukuoka

西日本リビング新聞社
リビング福岡

野尻由香

編集長



**福岡のママだって何かしたい！
「ぬいぬいワークショップ」開催**

被災地支援に関する特集を掲載後「主婦である私たちにできることはないの？」という問い合わせが数多く届きました。そこで、家にある新品のタオルを持ち寄ってもらって、一人1枚ずつ手作りの「ベビースタイ」を作るワークショップを企画。参加者からは「何かしたかったけど、一人じゃどうしたらいいかわからなかったのでもとても嬉しかった」との声が多く寄せられ、媒体として情報発信だけではなく、読者をつないで形にする役割についてもあらためて考えさせられる機会に。

Shizuoka

静岡リビング新聞社
リビング静岡

松永恵理

編集部 編集長



**被災地に絵本を通して“心”を届けたい
読者の善意で届けられた2万冊**

読者との絆を感じたのは「東日本大震災の被災者のために何かしたい」という思いでした。「しずおか絵本を楽しむ会」との協働で、「被災地の子ども達に絵本を送ろう！」プロジェクトを立ち上げ、紙面で呼びかけました。1カ月で約2万3000冊が集まり、50人以上のボランティアで整理し、被災地に送りました。「行動の迅速さ、反響の大きさ、読者力を生かせる支援は、やはりリビング」などの言葉を数多くいただきました。30年間で築き上げた“信頼関係と絆”だと思います。

Kyoto

京都リビング新聞社
リビング京都

山舗恵子

編集部



**読者モデルの変身ぶりに
“ワタシも”の声が続出**

地元デパートとのコラボ企画「夏的美アップフェア」では、紙面に50代と40代のリビング読者がモデルとして登場。ウィッグを使い、華やかな花柄プリントを身にまとう、初夏スタイルへの変身ぶりを掲載すると、「百貨店に行きたくなった」「新しいファッションにチャレンジしたくなった」との読者からの声が続出。掲載後しばらく同店のスタイリング担当者にも、多くのリビング読者から声がかかったようです。身近な人の変身ぶりに女ゴコロが動いた事例です。

Himeji/Kakogawa

播磨リビング新聞社
リビング姫路 古川

春名沙季子

編集部 編集長



**非日常が味わえるホテルイベントで
夢のあるものに触れるひととき**

隔月で開催している地元ホテルとのタイアップイベント。「赤毛のアン」「マイセン」など、毎回女性たちの憧れの世界をテーマにした講演と、同ホテルのシェフ考案のテーマに沿った特別ランチコースを用意。中でも読者の関心が高かったのは、アフタヌーンティーなどの英国文化を取り上げた「英国の魅力あふれる午後のお茶会」。「日常を忘れて、夢の世界が存分に楽しめる」というポイントが幅広い層の女性読者から支持を集め、毎回参加する人もいるほどの人気イベントとなりました。

Shonan

湘南リビング新聞社 リビング湘南
リビング平塚・大磯・二宮

福島祥子

編集部 編集長



**伝統文化復興公演による支援に賛同
鎌倉で被災地石巻の「雄勝法印神楽」**

津波被害にあった宮城県石巻を、現地の伝統文化を応援することで復興支援しようと地元出身の当社社員が立ち上がり、鎌倉新能の会場で知られる鎌倉宮を舞台に、石巻の国指定重要無形民俗文化財「雄勝法印神楽」の復興公演を企画。「収益は震災で存続を危ぶまれた同神楽保存会への義援金とするため一切返金はしません」の呼びかけに多くの賛同をいただき、昼夜共にほぼ満席。荘厳な社での珍しい出し物に、「感動しました。こういった支援はまたぜひ行ってください」など絶賛されました。

Shiga

滋賀リビング新聞社
リビング滋賀

牧 綾子

編集部 編集長



**“学べる”が親の心をキャッチ！
「作陶体験と工場見学ツアー」**

社会見学の一つとして、子どもたちが夏休みに見学できる滋賀県内の工場を「リビング滋賀」7月9日号で特集。これを受け8月に、紹介した工場1カ所の見学・作陶体験・昼食づくりの3要素を組み合わせたツアーを実施しました。参加者からは「工場見学は夏休みの自由研究にする」「予約する面倒がなく、1日有意義に過ごせた」と大好評。単なるレジャーではなく、“学ぶ”要素があれば、親はもちろん、祖父母も動く—これが教育に熱心な滋賀の読者を動かすポイントです。

Wakayama

和歌山リビング新聞社
リビング和歌山

野田知世

編集部 副編集長



**“支えたい”思いを集めて元気を発信！
わかやま食街（グルメタウン）**

春休みに食の一大イベントとして企画していた「わかやま食街」。開催を2週間後に控えた3月11日に東日本大震災が起こりました。自粛ムードもありましたが、地元の飲食店や企業と連携して和歌山から元気を発信しようと開催を決定。イベント本部と出店ブースすべてに義援金箱を置き、和歌山の食をアピールするとともに募金を呼びかけました。会場では和歌山の防災マップ・パンフレットも配布。2日間で約2万3000人が来場し、寄せられた善意は34万6329円にも上りました。

Machida Sagami

サンケイリビング新聞社
リビングまちだ・さがみ

増淵直子

編集部



**地元広告主と読者をつなぐ企画
Web限定で1000件以上の応募**

リビング創刊40周年記念として、プレゼント特集を企画。プレゼントの商品を紹介し販促効果を狙うという切り口で、クライアントからプレゼントを提供していただきました。初めての試みとして応募をWebのみで実施。結果は1133件の応募、新規えるこみ会員も602人登録という期待以上のものに！プレゼントは直接お店に取りに行くことが条件だったので「まさに地元ならではの企画」と、クライアントにも読者にも高評価を得ることができました。

Nagoya

名古屋リビング新聞社 リビング名古屋東
名古屋中央 南山の手 名北かすがい・こまき

中島幸子

編集部長



**手づくりミセス増殖中！
みんなで広げよう“ハンドメイド”の輪**

「手づくりミセスが熱い！」というウワサを聞きつけ、ハンドメイドの特集を決行。イベントも実施しようと、出展者を募集したところ、来る来るわ…。「ハンドメイドミセスってこんなにいるのね」と、反響の大きさにあらためてびっくりしました。しかも彼女たちの特徴は、自分たちでコミュニティを築いているところ。1人が動けば、あっという間に20人、30人の人が動くというから驚きです。イベントはこれから実施する予定ですが、また新たな輪が広がろうな予感！

Osaka/Hyogo

サンケイリビング新聞社
リビング大阪 兵庫

川楠洋子

大阪編集部 編集長



**創刊40周年編集キャンペーン
WE LOVE 40's PROJECT**

創刊40周年の編集キャンペーンとして、「WE LOVE 40's PROJECT」を1面・2面特集記事と公式サイト「えるこみ関西」で展開しました。40代ミセスにフォーカスし、食生活やツイッターなどのデジタルコミュニケーション力、老後資金や親の看取りなど、人生の折り返し地点に必要な情報を徹底取材。幸福度、人生の満足度をアップしようという記事への反響も大きく、リフォームや旅行、スマートフォンなどの営業広告とも連動して話題になりました。